

水環境・湖沼（7）（3-B-10-4～3-B-12-1）

本セッションでは湖沼の水質環境、プランクトンの動態に関する6件の発表があった。

（3-B-10-4）：藍藻類のDOM錯化を介した鉄利用性に関する研究である。UV照射により湖沼水中の錯化鉄化合物を分解し増殖速度への影響を検討したところ、霞ヶ浦湖水では増殖効果が認められ、また藻類の優占種遷移にDOM錯化が関係していることが示唆されたとの報告があった。一方、DOMの存在が藻類増殖に関係しない湖水もあり、その原因を解明していくことが今後の課題である。

（3-B-11-1）：八田原ダム湖におけるMicrocystis大発生のメカニズムを検討したものである。フィールド調査とAGP試験の結果から、流入河川増水時の無機リンの供給とその後の日照がアオコ発生の原因であることが報告された。今後、流入負荷量調査など実施し、汚濁制御対策へ展開することを期待したい。

（3-B-11-2）：気象変動が湖沼水温に及ぼす影響を検討した発表である。全国の93湖沼の過去30年の水温データを比較したところ、多くの湖沼で統計的に有意な水温上昇が確認されたという。また琵琶湖については、南湖では排水排熱の影響も大きいことが報告された。気象変動の影響を正確に把握するには、湖沼全体の熱収支を検討すべきである。琵琶湖をモデルとした今後の研究成果に期待したい。

（3-B-11-3）：最大水深233mの池田湖の全層循環に関する調査結果の報告である。25年ぶりの全層循環に至る水質変化をとらえた貴重な報告であった。地道なフィールド調査の継続があってこそその成果であり、敬意を表したい。過去のデータも豊富なので、今後、全層循環のメカニズムや、湖水の生物環境などへの影響を明らかにしてほしい。

（3-B-11-4）：分子生物学的手法によるピコシアノバクテリアの群集構造の季節変化に関する研究である。宮ヶ瀬湖では時期によって群集構造が変化していることが確認された。他のプランクトン現存量やダム管理方法との関連性について研究が発展していくことを期待したい。

（北海学園大 余湖 典昭）